

検	査	を	め	ぐ	る	動	向												
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	②②				
													大	谷	多	加	志		

「平成」の元号が30年で終わりを迎えるということで、テレビなどでも時折「平成を振り返る」というような特集を見かけるようになりました。小淵さんが「平成」の紙を持つ有名なシーンも、なんだかよく目にします。

30年前を、はるか昔のことに感じるか、ほんの一昔前と感じるかは、年齢や個々の感性によってさまざまだと思いますが、平成元年当時の映像を見ると、ブラウン管テレビに、公衆電話、列をなすセダン車…など、今や懐かしく感じるようなものも多く見受けられると思います。

一方、この連載のテーマである「発達検査」ですが、30年前と今と、ずいぶん変わったとも言えますし、あまり変わっていない部分もあるように思います。発達検査やその源流である知能検査は、世界で初めて作成されてからおよそ100年が経過しています。その間で、検査のあり方も徐々に変化してきました。今回はそのような検査の変遷や現在の動向を踏まえて、K式発達検査の特徴について述べてみようと思います。

ビネー式知能検査とウェクスラー式知能検査

現在の主要な知能検査や発達検査を大別すると、ビネー式知能検査とウェクスラー式知能検査に分けることができます。

日本におけるビネー式知能検査には、田中ビネー知能検査や鈴木ビネー知能検査があります。ビネー式の知能検査は、対象者の知的発達の水準を評価することを目的としています。K式発達検査は、京都市児童院において院内検査として用いられていたK式乳幼児知能検査とK-B（京都ビネー）個別知能検査を統合したものになりますので、部分的にですが、ビネー式の知能検査の流れをくんでいると言えます。

一方の、ウェクスラー式知能検査は、アメリカにおいて開発された知能検査で、日本では原版の検査の日本語版が作成され使用されています。ウェクスラー式知能検査においては、知能は「目的的に行動し、合理的に思考し、能率的にその環境を処理しうる総合的・全体的能力」と定義され、人の情報処理過程に注目した分析が採用されています（上野・海津・服部, 2005）。

つまり、さまざまな知的能力について、例えば図形など視覚的な情報処理と、言語的な情報処理とで、どちらの情報処理が優位か等を調べることによって、対象者の方に適した支援や関わりを考える材料とするわけです。例えば、言語情報の処理の方が優位な方であれば、その方に何か伝えたいことがある時に、単にやり方を（視覚的に）見せるだけでなく、「まず〇〇を～のようにして、

次に…」というように、言語化した説明を加えた方が理解が促進されるであろうことが予測できます。

いずれの検査も対象者の知的発達の状態を評価した上で、適切な支援にむすびつけることが目的であることに変わりはありませんが、数値的な情報量が多いのは、ウェクスラー式の知能検査の方かもしれません。そのためか、ウェクスラー式の知能検査を第一選択として使い、ウェクスラー式の知能検査では評価しにくい発達水準の対象者の場合だけ、ビネー式の知能検査や新版 K 式発達検査を使う、という機関や検査者も少なくないようです。

これは決して検査の優劣を示しているわけではありません。基本的には対象者と検査を行う目的に応じて適切な検査を使用すればよいということになります。

しかしながら、あくまでも個人的な感覚ですが、比較的システムティックな検査構造をもつものの方が、一般的には検査結果がわかりやすく好まれる傾向があるように感じています。やはり「検査」と名のつくものですので、数値的な結果がいろいろ出てきて、数値から説明できることがたくさんある方が、使いやすく感じるのは、わかるような気がします。

CHC 理論と知能検査

知能検査の分野で重視されるようになってきているものとして、CHC 理論があります。CHC 理論とは、現在の知能研究において有力と考えられている 3 人の知能研究者 (Cattell-Horn-Carroll) の名前を取ったものです。知能検査の分野においては、当該の検査が、この CHC 理論に準拠するかどうか

かというのは、一つの大きなポイントになってきています。

前号の「心理尺度」の話でも触れましたが、「知能検査」についても、限定的な対象や年齢、目的によるものを含めると、既にかんりの数の検査が開発されています。ただ、それぞれの検査が測定している「知能」には少しずつズレがあるはずで (むしろ全く同じものを測定するのであれば、別の検査を作る必要性がありません)、「知能検査」の乱立は「そもそも知能とは何か？」という知能観の混乱を招く恐れもあります。その意味では、CHC 理論のようにさまざまな検査をまとめあげる概念があることは重要なのかもしれません。

検査のグローバル化

近年では、多くの国で共通する知能検査が利用されるようになってきている。これは知能研究の成果が国際的に共有されていることの表れでもあり、同一の検査を使うことで国際比較研究が行えるなど、メリットも大きい。どの国においてもグローバル化が進行している状況の中、知能検査も必然的にグローバル化を迫られているのかもしれない。

このような時代的背景の影響もあり、近年の知能検査はどちらかというと検査課題に「文化的要素」をなるべく含まないように努めていることがうかがえます。これは、その検査が他の言語に翻訳されることを考えた場合、あまりに文化的要素が強いと、翻訳自体が成り立たない場合があるからです。

以上のような知能検査をめぐる動向を踏まえて、最後に新版 K 式発達検査の特徴と意義について触れてみたいと思います。

ドメスティックな検査としての新版 K 式発達検査

新版 K 式発達検査は、ゲゼルの発達診断やビネーの知能検査、ビューラーとヘッツァーの知能検査など、数多くの知能検査を参考にして作られたものですが、「K 式」つまり「京都式」の名の通り、京都という土地に根ざして発展してきた検査です。検査手引書の記述にさえ、京都弁が出てきたりしますので、ユーザーの方は実感がおありかもしれません。

そもそも、新版 K 式発達検査は児童相談所生まれの検査です。この検査が今日においても日本国内で広く用いられている理由の一つに「検査の実施順序が定められておらず、柔軟性がある」ことがあると思います。実際、乳幼児の検査を担当したことがある方は誰も経験があると思いますが、乳児さんに泣かれたり検査を拒否されたりしたら、どこかでこちらから歩み寄りをしないと進むものも進みません。現場における臨床の知として、ここ（実施順）は柔軟にすべきという判断があったのかもしれませんが。

一方で、これは「研究」という観点から考えると大きな議論を生じる点であるとも言えます。心理学を専攻した方なら必ず学習するものに「順序効果」があります。「順序効果」とは、同じような課題を続けて実施する場合、課題そのものの内容や難易度だけでなく、その課題を呈示する「順序」が結果に影響することを指します。例としてですが、いきなり複雑な立式を必要とする数学の問題を出されたとしたら解くことに苦戦するかもしれませんが、基礎的な問題から順に呈示し最後に複雑な問題が出されたとしたら、それまでの思考や経験を活用する

ことができるため、ひょっとすると解きやすくなるかもしれません。

通常、心理検査ではこのような「順序効果」の影響が生じないように、どの対象者の方にも、まったく同じ順序で課題を実施するのが基本です。つまり、ある時点の結果（結果 A）と別の結果（結果 B）を比較する場合、この 2 つの結果は全く同じ順序と手順で実施されていることを前提として、比較されるわけです。

新版 K 式発達検査の「実施順序を定めない」という発想は、現場的であり、実用的であります。やはりなかなか大胆な思い切りです。また、検査内容についても、多分に文化的な要素を含んでいる印象があります。つまり、非常にドメスティックな検査です。現在、2020 年を目標に改訂作業が進められていますが、このドメスティックさは、受け継がれていきそうです。この動きは、国際的な動向とは、少々異なるかもしれません。

これが適切かどうかは、今後も議論されるべき点であると思いますが、一方で、「発達検査」で測定しようとする「発達」も、やはり一定程度はドメスティックなものなのではないかと思います。子どもの育ちは時代や文化の影響を確実に受けています。では、それを調べる検査とはどうあるべきなのか…。何が正解ということはないのですが、何を目的に、何を重視して、検査を実施するのかという点を踏まえて、何より目の前の子どもや家族に、少しでも役立つものであるように、知能検査や発達検査のあり方について考えておきたいと思っています。